

---

# モンスターハンター

りせ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

モンスターハンター

### 【Nコード】

N 8 4 6 1 M

### 【作者名】

りせ

### 【あらすじ】

まだ世界にモンスターがあふれ、生活のため、強さを証明するため、武器防具を集めるため…  
様々な理由で狩りが行われていた時代の話。

## 伝説と伝説

ズウウン……。  
ズウウンウンウン……。

足音……。  
忘れるはずがない。

今から14年前…俺が4才の時だ。  
時間は寒冷期の朝方、昨日から降り続けた雨が止み、濃い霧に包まれる、そんな時。

場所は……ケット村。  
俺の故郷。

異変は寒冷期の前、温暖期から起きていたみたいだ。  
これは聞いた話でしかないが、例年通りなら活発なはずのアロワナやキレアジの姿がなかったらしい。

他にも、普段は危険を察知すると真っ先に逃げ出すほど気弱な草食モンスターアプトノスが凶暴になり、ケット村でも数人怪我人が出たほどだ。

この異変はケット村を中心に、ポツケ村近郊の「森丘」、ドンドルマ近郊の「砂漠」でも発生。

ギルドにも連絡がいき、すぐに調査が始まった。

ギルド直属の獵団「ギルドナイト」を各地に調査に向かわせた。

異変の報告は多数寄せられ、調査は極めて慎重に行われた。

採集によるその土地の植物や虫のサンプルの入手、モンスターの生態系の変化の調査…。

そして迎える寒冷期。

今だに結果どころか可能性にも行き着けないギルドはこの調査から一旦引く考えを明らかにした。

これはギルド面子に関わる問題だが、すでにワンシーズンを終えてしまった。

これ以上の狩場の封鎖はできないと判断したのだ。

もちろん調査自体は続けていた。

今までの半分以下の規模で。

ギルド内で古の文献<sup>ゴースト</sup>を調査していた竜人族の学者が一際興味を引く文献を発見した。  
中身はこうだ。

弱き者は傷つかせんと振るわず

知らせるために振るう

しかしすでに遅かった。

ついに目撃情報が入る。

「山が動いた…」と。

文献に記された名前は「老山龍ラオシャンロン」

山と間違われるほどの巨体と、歩く度に大地が揺れるほどの重量。

ラオシャンロンの移動ルートに村や町があってもその巨体故に気付かずに通過することだろう。

ギルドはすぐさま対策を講じる。

計算ではまっすぐにケット村に向かっていて、7回目の日の出ともにケット村に姿を見せるというのだ。

ラオシャンロンの通過点であるケット村の前に「砦」を築き、ラオシャンロンを迎え撃ちし、移動するルートをずらす。

ケット村は幸にも崖下にあつたから地形を利用することで簡単に「砦」はつくれたようだ。

砦の広さ、ラオシャンロンの移動速度、その未知の危険性から4人でクエストを遂行しなければならないことになった。

絶対に成功させなければいけないクエスト故に一般ハンターでは荷が重いと判断され、信頼度の高い「ギルドナイト」の精鋭4人が決定。

砦が完成すると同時期に、砦の上から巨大な岩石を下にいるラオシャンロンに投石する機械も備え付けられた。

前日

大雨の中、ラオシャンロンの軌道とはわずかにずれた避難所に避難が行われた。避難所と言っても平地にテントが立てられた非常に簡易の物だ。

まだ見ぬ恐怖にテントに引きこもる者

不安で砦のほうを見たまま動かない者

ギルドはラオシャンロンの事で手一杯なだけに、そう遠くまで誘導できなかったと思われる。

しかし…

それが全ての始まりだった…。

## ドンドルマの空

密林。草木が生い茂り、大量の水がある。それを狙って草食のモンスターが集まってくる。さらに草食のモンスターを狙って肉食のモンスターが集まってくる。

それと同時に大型の飛竜種、牙獣種：そんなモンスターの繁殖の場所でもある。

そんな溢れんばかりの生命の息吹を感じながら採取をしている一人と一匹がいる。

「ご主人様！次はなにを採ればいいかニヤ？キノコ？キノコ？」

「ミケ。キノコはさつき採ったからもういいわ。次はハチミツをお願い。いや：やっぱり薬草をお願いできる？」

「薬草ニヤ？ 了解ですニヤ！」

少女にミケと呼ばれた猫のような生き物は、獣人種のアイルー族。その容姿は猫そのもの。違うことは猫よりちよつと大きいことと、二足歩行をする分体格がいいこと、道具が使えるほどに手は進化していること。そして、一番の違いはその頭の良さだ。彼等独自の言語を使っているのに、人語も理解し操る。野生のアイルーも人語を理解するほどではないがオリジナルの武器を作り、人間のように狩りほしないもその武器で身を守っている。

もともと忠実心がもともと高いのか、人間にとっても扱いやすく人間社会にすぐに溶け込んでしまった。料理をつくる者、人間に連れられ狩りについて行く者。

このミケの場合は後者に当たる。

「ご主人様！ この辺には薬草はなさそうですニヤ！」

「そう：ありがとう。じゃあそろそろメインターゲット行こっか。」

「了解ですニヤ！」

そう言い、少女が立ち上がった瞬間なにかが太陽の光を遮った。今日は雲一つない晴天。となれば可能性は一つ…。

「ミケ気をつけて。近い。繁殖期のイャンクックは気が荒いから危なくなったら逃げてね。」

そういい終わる前に少女は自分の身長とほぼ同等の大きさのヘヴィボウガンを展開する。

武器は『バストンメイジ』。

イャンクックより強力な固体『ゲリヨス』、しかもその亜種の皮と、マカライト鉱石をふんだんに使った武器だ。

パワーバレルを取り付けてあり、威力はイャンクックの鱗を砕くには申し分ないだろう。

バサツ・・・バサツ・・・。

影が一人と一匹の前で止まり、大地に降りようとしているのがわかる。

少女はあらかじめもってきておいた毒弾Level1を装填し、着地と同時に翼膜に撃ち込む。

弾はその場で炸裂し、イャンクックの体内に毒が注入される。しかしこの毒は体力こそ奪うも、それだけでモンスターを倒せるほど強力ではない。

今の攻撃でイャンクックもこちらに気づいたようだ。

その容姿は『大怪鳥イャンクック』の名に相応しく、人間を超える大きさの鳥だ。ピンク色のものは羽毛ではなく鱗になっていて、切れ味の悪い武器で戦いを挑むものなら簡単にはじき返される。

耳は普段はたたんでいるが、獲物が近くにいたときは倍以上に展開して、音を最大の情報源にし、狩りに挑む。



イヤンクックは大地を力強く搔くと、「グワアア・・・」とさえずる。

しかし次の瞬間には自分に危害を加える者に向かって走り始めていた。

少女はわかっていたかのようにその攻撃をかわすと、銃口を後ろにむかつて突進していったイヤンクックに向け直し、エイム無しでもう一発、さらにもう一発翼膜に撃ち込む。

毒になったのを確認することなく通常弾Lv2を装填しかえる。

毒が撃ち込まれた翼膜は紫色に変色し、毒が効いているのが目に見えてわかる。

イヤンクックが体勢をこちらに向け火球を放つも、こちらには届かない。

その攻撃をまっていたかのようにミケがイヤンクックの足元にもぐりこみ、石斧で叩いて注意を引いてくれている。

完全に注意を引くとイヤンクックは鋭いクチバシでミケに噛み付こうと頭を振り下ろす。

ミケの働きを見て少女は小さく「うん」と言うと、またもエイム無しで弾を放つ。その弾は振り下ろしたイヤンクックの頭・・・耳にヒットする。

そんなことでは耳は壊れないが、今までの動きを見て少女はこのクエストの達成を確信した。

「ウラノスさん聞きました？ また例の彼女がやりましたよ。」

身長の高い男がウラノスと呼ばれた男に数枚の報告書を渡す。ウラノスは適当に目を通してながら何枚かめくり、ある報告書に行き着くとピタッと手を止める。

「なんだイヤンクックをソロ討伐か・・・。でかい獲物ではないな。」

「報告書にスタンプを押しながら答える。」

「ウラノスさんわかつてるくせに。彼女18ですよ？」  
にへらにへらしながら低身長の方が皮肉交じりに言う。

ウラノスはわかつている。彼女の最近の目覚ましい活躍も、その素性も・・・。

「報告書ありがとう。下がっていいぞ。」

ウラノスがそう言ったとたん滅相もないと言わんばかりに首を振り答える。

「いえいえ！ それより今日は晴れてます。気分転換に外に出てみてはいかがですか？」

低身長の男はそう言い終わると、失礼しましたと付け加え部屋を出て行った。

今日は寒冷期が終わったばかりといって暖炉をつけているにはちよつと暑いくらいのすがすがしい天気だ。こんな日は自然とクエスト受諾書も多い。

「うん。もうちよつとしたら外に出てみるか。」

窓の外を見ながらそうつぶやいた。

「シエロちゃん無事だったかい！ 流石だね。今回は特使からのクエストで、イヤンクックに鉄槌を下してほしい依頼だったね。はい報酬金。」

若い女性の受付が多い集会所兼酒場には珍しい年季が入ったちよつと小太りのおばさんから報酬金が渡される。

「ありがとうおばさん。」

女性ハンターは特に珍しくはないがここまで若い女性ハンターは珍

しいのか、この集会所に初めて訪れたハンターは必ずと言っていいほどシエロに話しかける。

最初は戸惑ったものの、最近では受け流し方を心得てきた。シエロは珍しい目で見られのがたまらなく嫌なのだ。

「ちよつと早く帰ってきすぎたのニヤ。」

酒場から出ると港街らしくたくさんの人がいた。薄暗い酒場を出たばかりなので強い日差しに目をくらませながら酒場を後にする。

この港街・ドンドルマは年中にぎわっている。

一日やそこらでは見て回れないほどたくさんの店が展開され、武器防具の工房も普通のものより3倍、4倍もでかく一度に大勢のお客の注文をこなせるようにしているが、2日先まで予約でいっぱいなほどだ。

街の一角に大勢集めっているのが『獵団』の人たちだろう。その人ばかりは街のいたる所にあつて、色々話し込んでいるようだ。シエロも何度か獵団というものに誘われたことはあるが、全て断っている。そもそも獵団とは志や目標、仲がよい者どおしで組むことが多い。

生活のためがほとんどだが、中には狩りに魅せられ自分の狩りの腕をあげようと、武器防具のコレクションなんて目標で狩りに赴いてる者もいる。

シエロはそんな者達と狩りに対する気持ちを共有できないことがわかってから断るのだ。もちろん一人で狩りが寂しくないとさえは嘘になる。が、シエロにはどうしても達成しなければならぬ目標があるのだ。

その目標は人に話せば鼻で笑われるだろうし、生きているうちに達成できるかもわからない。

そんな目標を共有できる仲間は見つからないとわかってから一人で黙って進むしかないのだ。しかし、そんな目標があるからこそシエロにヘヴィボウガンがかつがせたのだろう。

そしてこのドンドルマにはギルド本部がある。

街の中心、一際大きい建物がそれだ。

各地にある支部で調査された報告書が届き、それをひとつにまとめている。

モンスターの取引価格や、モンスターから剥ぎ取られた素材のレア度認定などもここで行われる。

「ミケ。もらった報酬金で次回の狩りのための準備して、残りで何回かご飯食べられるよ!」

黒く、肩まである髪の毛を垂らしミケの顔を覗き込む。

「ボクの分もよろしくニヤ。」

「あ!それとミケ、明日から腹筋じゃなく腕立てね。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・了解ですニヤ。」

夜にクエストに向かう人も多い。まだまだドンドルマは眠らない。

## 漆黒の鱗

「ウラノスさんこれ目を通しておいってください！」

「ウラノス！今日ポツケ村から特使が来るから相手頼むぞ！」

「ウラノスさん報告書間違えました……。」

ギルド本部は支部と違って情報が多いからどうしても忙しくなってしまう。

「あれがウラノス殿か……。」

マフモフ装備の上着だけ脱ぎその一部始終を見ている老人がいる。

「ああ！ポツケ村からの特使様ですね。おはなしは伺ってます。こちらへどうぞ。上着お預かりしますね。」

ロビーの受付嬢が老人に気づき、話しかけながら上着を預かる。

「ふむ。ありがとう。」

受付嬢が先導し、ウラノスの部屋の前で止まる。

「ウラノスさん！ポツケ村からの特使様きましたよ！」

ドアの前で奥にいるウラノスに向かって声を張り上げる。

「とおしてくれ！」

返事はすぐに返ってきた。

「失礼しますぞ。」

受付嬢が扉を開けると、そっぴいなながら部屋に入っていく。

「ウラノス殿お初お目にかけます。ポツケ村から来たキオンという者ですじゃ。」

そっぴいなながらキオンと名乗るものは右手を差し出した。

「遠方からわざわざご苦労様です。ウラノスです。」

立ち上がり、差し出された右手に握手しながらそう答えた。握手を解くと、机をさんだ向こう側にある椅子に向かってどうぞのジェスチャーをする。キオン老人も軽く会釈すると荷物を足元に置き、

そこに座った。

「報告書に目を通しましたよ。雪山で気になる事例がおきていますね……。」

ウラノスは自分も席に座りながら机のうえにおいてあった報告書をパラパラとめくりながら言った。

「そうですね。今日は直接の報告と、見せたい物があつて来た次第です。」

そつといい終わつた時、失礼しますとさっきの受付嬢が飲み物を二つ持つてきて置いていく。

失礼しましたと扉が閉じたのを見計らつてウラノスが声を出す。

「まずは報告から伺いましょう。」

キオーンは目の前に置かれた飲み物をすすつて、一息つくと口を開いた。

「ポツケ村には立派な農場があるのはご存知ですか？」

延びているが、整えられた白い髭をとかしながら言う。

「ええ。ポツケ村には2回ほど訪れてますから。確かポツケ農場でしたよね？ あの農場はすばらしい。多くの施設を持ちながら、その全てに管理が行き届いてる。」

ウラノスはギルドの仕事で一回と個人的に一回行っている。そのとき当然ポツケ農場にも訪問している。

「ありがとうございます。では、あの農場の採掘場を覚えてますかな？」

「もちろんです。私が行つたときはまだまだ開拓途中でしたが……。」

少し視線を上に向け、思い出すように言う。

では……と小さく言うと、足元に置いた荷物を少しあさり、両手サイズの箱を取り出し机のうえに置いた。

「報告と見せたい物が一緒になつてもうしわけないが……。」

そついいながら手袋をすると、机に置かれた箱を開けはじめる。動かないように梱包してあるのか、少々まさぐつた後ついに手に持つ

たのか表情が強張った。

そしてそれを引きずり出す。

黒い物体。見ただけでその重量が想像できるほど禍々しい黒色。ウラノスは眉間にしわを寄せ、しばらくみつめた後言った。

「これはいったい？」

机の引き出しを開き、自分の手袋を出すとそれをはめた。

「やはりウラノス殿でもわからないか・・・。」

そついうと黒い物体を手渡す。

それを受け取ろうとウラノスがその物体に触れた瞬間14年前のできごとがフラッシュバックする。

押さえつけていた嫌な記憶が断片的にはあるが思い出し、嫌な汗がドツと出、心臓が高鳴る。

ドクン・・・。

手元が狂い危うく落とすところだった。

「どうかしましたかな？」

ドクンドクン脈打つ心臓の音。

「いや・・・大丈夫です・・・。」

体勢を整えるともう一度手を伸ばし受け取ろうと試みる。

今度は難なく受け取り、ほつとする。

「これは・・・鱗・・・？ いや・・・鱗に似ているが鱗よりもつと硬質な・・・。」

触ったり、こんこんと叩いて確かめる。

「流石ウラノス殿。分析結果これは鱗と断定されましたぞ。」

「ほう・・・で、これはなんの鱗ですか？ 私が知らないとなると・・・。」

もう一度眉間にしわをよせよく眺めてみる。

「おそらく新種のモンスターでしょう。実はこれ、ポツケ農場の採掘場から掘り出された塊なんですじゃ。二つ掘り出されたんですが、もう一つは実験用につかわれております。」

持って触ってみればわかるこの良質さ。

何年たっているかわからないが、今剥ぎ取ったばかりと思わせるほど生き生きとしている。

「ありがとうございます。これ、お返しします。」

キオーンに渡そうとすると・・・。

「いやいや。これはウラノス殿に調べてもらつたためにもってきたのですじゃ。上には報告しておきますので、どうぞもらってください。」

「

そう言うのと渡そうとした黒い鱗を突き返す。

ウラノスもすでにこの鱗に興味深々だった。

「これは興味あります。報告もありがとうございました。この鱗のようなものはこちらでありがたく預からせていただきます。」

「今日はもう長旅で疲れたことでしょう。宿をとってあるので今日はドンドルマで休憩していただくさい。」

鱗を自分の引き出しにしまい、すつと立ち上がる。キオーンも準備ができたのか、ほぼ同時くらいに立ち上がる。

もう一度無言で握手するとキオーンは部屋を後にする。

キオーンが軽く会釈し、部屋から出るとさっきの受付嬢が上着をもつて立っていた。

「上着です。どうぞ。宿まで案内します。」

にこつと笑つと上着を渡し、先導するように歩き出す。

上着を受け取ると、キオーンも後について行きながら喋りはじめる。

「ウラノス殿は若いのに素晴らしいな。」

受付嬢がチラツとキオーンの方を見て言う。

「ウラノスさん今年で18歳なんですよ。ギルドに入つたのが6歳の時って言うてたから、12年目ですね！キャリアだったらその



辺の人には負けなですよ。」

キオーンは本当に驚いてた。わずか18歳の少年が自分と同等以上に話をしていたのだ。

若く、知恵を持つ青年がいるとは聞いていたがまさか18とは……。

「おまけに実績も相当なものですよ！今もほとんどウラノスさんを中心に回ってるようなものですしね。」

受付嬢はなぜか自分のことのようにうれしそうに言った。

「若くしてギルドに入るとは……どんな理由があったんでしょうな……？」

表情は一転少しうつむきぎみになる受付嬢。

「それはわかりませんね。」

顔を上に戻すといつのまにか宿が見えてきていた。

「キオーンさんあの宿です！今日は本当にお疲れ様でした！もしよかったですら明日は観光でもしていくといいですよ。」

「ありがとう娘さん。助かったよ。ウラノス殿によろしく言っておいてくれ。じゃあおやすみよ。」

といいながら背を向けると宿の入り口に向かって歩き始める。

「おやすみなさい。」

キオーンの背中に向かってお辞儀をする。

また明日がはじまる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8461m/>

---

モンスターハンター

2011年2月1日03時10分発行